

「樋口一葉」論

——「出世」を願う女達——

鈴村 麻希子

はじめに

一葉の小説は、これまで様々な角度から論じられ、解釈がなされてきたが、私は女主人公の「出世願望」という観点から、『にぎりえ』と『わかれ道』について論じていきたいと思う。

『にぎりえ』のお力、『わかれ道』のお京は共に「出世」への思いを強く抱いている人物として描かれている。お力とお京の心の内を解明し、明治という時代において女が望んだ「出世」と、「出世」を望んだことによって起こる作用について考えたい。

さらに、一葉がそのような女主人公を描くことで何を訴えたかったのかという点についても考えてみたいと思う。

一

ではまず、『にぎりえ』において酌婦という身分でありながら、「出世」を強く望んだお力にとつての「出世」とは何であつたかをはつきりさせたいと思う。

私は、お力は身分の高い人の奥様になることをずっと望んでいたと考える。お力にとつての「出世」は、「玉の輿」に乗ることだったのである。お力は「玉の

興」に関するかと思われる発言を何度かしている。

・此方と思ふやうなは先様が嫌なり、来いといつて下さるお人の氣に入るもなし

〔にこりえ〕本文一四頁六行目

・いつそ九尺二間でも極まつた良人といふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、それが私は出来ませぬ。

〔にこりえ〕本文一三頁七行目

これらの発言は、お力が並の平凡な暮らしをしている男とでは結婚したいと思わないという意志の表れであり、又、「此方と思ふやうなは先様が嫌なり」という言葉から、お力がかなり身分の高い人との結婚を望んでいたということが読み取れる。

そして、お力が望んでいた「出世」が「玉の興」であることを決定づけることとなった言葉は、朝之助にお力の出世を望む気持ちを指摘された後で「『私等が身にて望んだ処が味噌こしが落。何の、玉の興までは思ひがけませぬ』（本文一四二頁四行目）」というお力の発言である。ただ単に朝之助が「出世」と言ったただけであるのに、お力はその返答として敢えて「玉の興」という言葉を使っているのである。これは、お力が普段から「出世」＝「玉の興」という思考をしていたこと

から出てきた言葉であると私には思われてならない。

お力の「出世」に対する思いについては、藤井公明氏のように、お力は自分のことを「不幸な宿命に生れた女にちがいない。」と考えているため、出世は諦めて^{（注1）}いる、とされているものや、松坂俊夫氏の「玉の興に乗るというようなこと」を望む女としてではなく、一葉が日記の中で述べている「『世のくだれるをなげきてこ、に一道の光をおこさん』と志すような女としてお力を想定」^{（注2）}しているという、社会変革を果たすことがお力の望みであるという説もある。

確かに、お力には自分の三代伝わつての不幸な宿命を甘受する思いが見られないわけではないが、お力の・私等が家のやうに生れついたは、何にもなる事はできないのでござんせう。我身の上にも知られま^{（注3）}する（本文一四一頁一五行目）

という言葉からは、自分の不幸な宿命を嘆きながらも、このままでは決して人生を終わらせたくない、必ずここから上昇したいという強い思いが伝わってくるように私には思えるのである。だから、お力が「宿命」だからと、「出世」を諦めているとは到底思えない。しかし、その「出世」が社会変革を志したものであるかどうかを考えると、首を捻らずにはいられない。お力

は一葉自身であるとは以前から言われていることであるが、たとえ仮に、一葉がお力に自分の姿を重ねあわせて書いていたとしても、お力は一葉が創り出した人物であり、一葉ではない。又、一葉はお力を酌婦として描いているのである。酌婦が「国是の道」を講じ、「一道の光をおこさん」などと考えるであろうか。

松坂氏は、お力が「銘酒屋の女」としては想像もできないような志向を抱^{注3}いていたからこそ「一葉はお力を『氣違ひ』として創造せずにはいられなかった」と論じておられるが、私には、才能あるお力が貧乏故に酌婦という職に転がり落ち、そこから願っても願っても脱出できず、代わりに、源七を筆頭として多くの男達を不幸にしてしまったという状況に耐えることができずに、徐々に狂っていったのではないかと思う。お力は、自分の身の不幸を嘆いていたとは思いますが、その思いが社会・国家に対する怒りにまで向いていたとは思えないのである。

お力の三代に渡って伝わる「氣違ひ」とは、「酌婦」という社会の底辺にいながらも、まだ、「出世」を望み実現できることを夢見、自分自身の現実を直視することのできないという質のものではないか。祖父も父も自分の状況を直視できず、常にいつかは出世できる

と信じ続けていたという点で、同じ「氣違ひ」だったと考えられるからである。

だから、お力が「氣違ひ」じみているのと「出世」への志向が社会変革であるということは結びついていないように思われる。

以上のようなことから、明治という時代を考え、酌婦という仕事を考えた場合、やはり岡保生氏の言われる通り、お力が望んだのは「氏なくして乗る玉の輿^{注4}」であつたとしか考えられないのである。お力は、自分の「賤しい身の上」（本文一三八頁一七行目）を忘れることができる程の上流階級の人と結婚したかったのではなからうか。

お力が出世することに執着するのには、今の酌婦という状況から抜け出す方法が、「出世すること」つまり、「玉の輿に乗ること」しかなかったからである。

そしてまた、『わかれ道』のお京が望んだ出世も吉三の言葉通り「上等の運が馬車に乗って迎ひに」（本文一九一頁十四行目）来ること、すなわち「玉の輿に乗ること」であつたかと思われる。

では、お力の「出世」への行動をみていきたくと思う。

お力は昔からの情夫、源七のことを心の奥では今でも愛していると私は考えている。しかし、ここで注意しておきたいのはそれは愛であって、決して恋、ときめく気持ちを持つ恋ではないということである。だが、この愛のためにお力はひどく苦しむ。自分のために身上をはたいてしまった源七のことを思うと胸をかきむしられるような気持ちになり、それが持病となって表れる反面、「まい／＼つぶろの様」(本文一二三頁一二行目)な姿の源七は、酌婦であるお力の行状を表すものとなってしまっており、それはお力にとって厭わしく、見たくないものにもなっているのである。

源七に対してこの様な両極端の気持ちを常に抱き、ジレンマに苦しんでいたお力は、遂に七月十六日の夜、耐えられなくなって店を飛び出し、一種の錯乱状態に陥る。そして、「菊の井のお力を通してゆかう。人情しらず義理しらずか、そんな事も思ふまい。」(本文一三五頁五行目)と、決意も新たに、酌婦としての自分

を認識するのである。このことはつまり、源七のことをきれいさっぱり忘れてしまおうという決意のようにもとることができると思う。「菊の井のお力」であつたならば、金が無くて、捨てた男のことなどを考えて悩んだりはしない、と自分に言い聞かせ、お力は自らの行為を、心の中まで酌婦になりきることで正当化したのである。そして、自分の心の中から源七を排除することを決意し、お力は「するだけの事」『「出世」』に向かって突き進もうとするのである。

お力にとって「出世」と関係してくる男は結城朝之助であるが、七月十六日の夜、朝之助に肩を叩かれるまでは、朝之助はお力の中でそれほど重要な位置は決めていなかったと考えられる。なぜなら、『「十六日は必らず待まする、来て下され」と言ひしをも何も忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助」(本文一三六頁一行目)だったのである。つまり、お力は朝之助に声をかけられるまで朝之助のことなどすっかり忘れていたのだ。もし、朝之助がお力にとって重要な人、〈好きな人〉であつたなら約束を交わしていながらそうまでコロリと忘れるはずはあるまい。やはり、この時点までは朝之助は単なる〈客〉に過ぎなかったのだろう。しかし、この〈客〉の領域は七月十六日の

夜、お力の中で越えられることになる。

十六日の夜、錯乱状態の中でお力は酌婦という立場から心の中の源七を排除することを正当化して、「出世」への思いを果たすことを決意する。だが、お力は自分の思いに溺れて気が狂いそうになる。その時、お力に声をかけて現実世界に連れ戻すのが朝之助なのである。お力には、朝之助が「救いの手」のように思われたのではないか。そしてこの時、自分の「出世」への思いを叶えてくれるかもしれない人として、朝之助がお力の心の中で大きな比重を持つ存在になったと考えられる。

この夜、お力は朝之助に甘え、彼によって自分の「出世」を果たさせようとしていると思われるが、お力の言葉で一つ気に掛かるものがある。それは、朝之助への愛を打ち明ける場面で、朝之助のことは好きだが、奥様に「持たれるは嫌なり、他処ながら慕はし、」（本文一三九頁一二行目）という所である。この言葉は、表面の意味だけで考えられるとお力が朝之助の妻になることを拒否しているかのように受け取れるが、本当にそうであらうか。お力の気持ちを考える前に、朝之助がお力との結婚を考えていたかどうかをみてみると、朝之助はお力の素性に興味はあったが、本気で彼女のこ

とを考えてはいないように私には思われる。朝之助のお力への視線はいつでもどこか一步退いていて、冷静にお力を眺めているように私には思われてならないのである。

お力は、気位の高い女である。そんなお力が、本気で自分との結婚を考えていない朝之助に対して奥様にしてほしいなどと言える筈はないのである。しかし、本当は酌婦から脱出し、「出世」したい、つまり奥様になりたいのである。だから、わざわざ「奥様」という言葉を会話の中に入れて朝之助に「奥様」としてのお力を意識させようとしたのではないだろうか。

朝之助に対して一通り自分の気持ちを伝えた後お力は、自分の一番触れられたくない幼少の頃の思い出を告白する。お力は父親について、名人の腕を持っているながら何にもなることができなかつた悲劇を語る。これには、後世に名を残すべき人であつたのに何もなすことの出来なかつた父への憐憫と、お力自身の悲しさと悔しさが感じられる。お力本人も、美貌と才能がありながらこんな銘酒屋で酌婦をしている、為に「我身の上にも知られます」（本文一四一頁一六行目）という言葉が心をつくのであらう。

この言葉は、お力から朝之助に対してのSOSの

メッセージだったように私は思える。お力はおそらく、朝之助からの返答として何もかも打ち崩してくるような強い愛の言葉を期待していたのではないだろうか。しかし、このお力のメッセージに対して朝之助は、全く応えようとはしない。それどころか『お前は出世を望むな』（本文一四一頁一八行目）と言うのである。

私にはこの言葉は朝之助からお力に向けての訣別の言葉であるようにお力には聞こえたのではないかと思う。朝之助は、お力のことを本当は理解できていたのではなからうか。先程も言ったように、朝之助のお力を見る目は冷静であり、一歩退いている。お力の「救ってほしい」という気持ちが分かっていながら、朝之助の気持ちの中にお力を救ってやろうという気持ちが全くなかったがために、まるで、お力とは外部の、関わりのない人間のような言葉を言ったのではないか。そして、この言葉ほどお力にとって残酷なものはないか。果たであらうと思われるのである。

返答としてお力とつきに言ってしまった『えッ』（本文一四二頁二行目）には、岡保生氏が言われるように図星を指されたからという思いは勿論ふくまれているだろうが、それだけではなく、朝之助の気持ちを

読み取った嘆きの声ともとれないであらうか。お力は、自分を救ってくれる唯一の望みだった朝之助の正体を知り、もうどうしてよいのか分からない状態になり、また自分の心の中に籠ってしまふかのように見える。しかし、その夜お力は帰ろうとする朝之助の下駄まで隠して彼を無理にでも泊まらせ、肉體関係を結んでしまふのである。

このお力の行動について山本洋氏は「結城に身をまかせる」ことは「将来の目論み」つまり、「結城の『奥様』になること」の「有力な布石となる行動」である^{（注7）}としているが、私にはそればかりとも思えないし、また常日頃売春行為を行うことの多いお力が、肉體関係を結んだことを結婚への有力なステップにできると思っているとは考え難い。山本氏と同じように朝之助への期待から関係を結んだという論に松坂俊夫氏がいる。松坂氏は、お力が朝之助に身をまかせたのは「自分の心を知ってくれて、共に生きてゆくことができるかもしれないという期待」からであると同時に「その一夜、お力は朝之助の愛情の限界を知らされたものと考えられる。」^{（注8）}としている。確かに、お力は朝之助に期待を抱いていたとは思われるが、それは朝之助がお力の心を知ってくれて嬉しかったからではない

と私は考える。

また、お力と朝之助を「死の世界」の人間と「生の世界」の人間としてとらえ、朝之助の「『出世を望むな』」という言葉が二人の間の断絶を露にしたと考えておられる前田愛氏は、お力が結城に身をまかせたことについて次のように述べておられる。

お力にとって、結城との交通を保証するものは、お互いの生理でしかなかったからだ。私はそこに生の世界の明るさを求めずにはいられないお力の暗い情動のしるしを読みとる。

（「にぎりえ」の世界）（注。）

確かに、絶望の中のお力にとって朝之助と関係をもつことで互いに共通のものを共有することができるといふ思いはあったように思われるし、朝之助の明るさに惹かれていたのも事実であると思う。しかし、お力の中には朝之助に対するもつと複雑な思いがあったのではないだろうか。

お力は、朝之助の言動により彼が自分を救ってくれないことに気付き絶望する。だが、それでもなお、お力は朝之助に身をまかせずにはいられなかった。そこには、お力の「出世」に対する強い執着心が見られると思う。

源七への思いを吹つきろうとしたお力は、自分の「出世」への思いを果たすために朝之助を利用しようと考えていた。そして、そのために自分の全てを曝け出し、朝之助に運命を賭けてみたのである。しかし、朝之助はそんなお力の気持ちとは裏腹に、決してお力に深入りしようとせず、あくまで客観視しようとする。お力は朝之助のそういう気持ちに薄々気付きながらも、心の奥々で「出世」への執着心が捨てられないために、朝之助と関係を持つことで彼と心が通じ合い、彼の心を動かすことができるかもしれないという微かな可能性に賭けたのではなかったか。そしてまた、朝之助をお力の中へ、もつと深みへ、濁り江に引きずりこもうとしたのではないかと私は考える。

三

『わかれ道』のお京の場合の「出世」への行動について考えてみたい。

お京の望む出世も、お力と同じく「玉の輿」だが、お京にはそれが願望で終わることが最初から分かっていたように思われる。お京は吉三に「出世」の可能性を指摘された時に「胸の燃える事がある」（本文一九

一頁十七行目」と告白している。これは、「火の車」(本文一九一頁十七行目)と掛けた言葉であろうと思われるが、これこそ山崎眞紀子氏の言われるように「夜間になっても一人座って針仕事を黙々と続けている境涯に對する、やり場のないお京の思ひ」^(注10)であり、少しも上昇することのない自分の暮らしへの苛立ちと限界を暗示した言葉と思われる。そして、この時すでにお京は、「妾」になることに少しづつ気持ちが傾き始めていたのではないかと思われるのである。

お京の強い出世願望は、妾に行く、という歪んだ形で果たされることになる。だが、お京は「いつその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ」(本文二百頁二行目)とは言うものの、この「出世」が金で身体を買われたと同じ種類のものであることは思っていないように思われる。そう思っているのはむしろ吉三の方であり、吉三は「妾」に行くお京に對し、徹底した拒絶するのである。

では、当時「妾」は社会においてどのような位置に置かれていたのだろうか。まず、法的な位置から見ていきたい。以下、関礼子氏『姉の力樋口一葉』^(注12)、高群逸枝氏『女性の歴史』(下)を参考にして、そのおおよかな内容を要約したものである。

明治三年に出された新律綱領では妾は妻と同じ「二等親」であることを認められていた(関)のだが、明治十三年に公布された新刑法では政府の最高顧問であったフランス人ボアソナードらの努力によって、これまで戸籍内にあった妾が除かれ、法的には妾制度は消滅することになるのである。(関、高群)しかし、妾の産んだ子供は「庶子」として家督相続権を有する者として認知されており、事実上は妾の存在は公認されているのである。(関)

社会的には藤井淑禎氏の論文に詳しくあるが、「權妻の流行」した時期であり、菅聡子氏によれば、「權妻の座につくことはむしろ女の出世とさえ見なされた^(注13)」という状態であった。

さらに、妾は一種のビジネスとしても当時の人々には受け取られていたようである。松田良一氏の著書『日本のシゴトロジョー』によると、明治十三年五月一日付の「東京朝日新聞」に「妾と売春が内職」としてあげられていることが記されており、各報酬は次の様だったらしい。

妾は、二、三人を旦那としてもち、それぞれ一月7円の手当てがもらえるという。しかし、周旋屋に25%の世話料をとられるので、旦那を一人だ

けなら5円25銭、三人をかけもちにするなら15円75銭が収入になるといふ。売春は一人を相手すると50銭になると報告している。

『日本のシゴトロジョー』松田良一著^(注15)

このことから、まず、妾が当時、女の内職の一つと考えられていたということが分かる。妾を内職、つまり仕事と考えた場合には、お京の妾になるという行為は、単なる転職に過ぎない。だが、よく考えてみると妾と同時に売春も内職として新聞にあげられており、裏を返せば、妾と売春は全く同種のものとして受け取められていたのだ。つまり、妾も所詮身を売って金を得ることと同じであると世間は考えていたのである。

以上、当時の妾の位置について考えてきたが、妾といふのは、関札子氏の言われる通り「実に曖昧な存在」^(注16)である。法的には認められず、社会的には容認されており、そして世間からは羨望（経済面において）と軽蔑（倫理、精神面において）の眼差しで見られているのである。

そんな妾の位置につくことを決意したお京は、一体どんな思いであつただろうか。お京は以前から強い出世願望を抱いており、現在よりも少しでもいい生活をするために、毎夜遅くまで仕立て仕事に精を出してい

た。しかし、裕を一着作っても8銭から10銭^(注17)しかもらえず、全く上昇のない生活を送るばかりのお京には、日毎に金のあることこそが「出世」であるように思われてきたのではなからうか。そして、少なくとも月々5円25銭はもらえる妾の生活への誘いが「上等の運が馬車に乗つて迎ひに来た」と同じだと錯覚したのではないだろうか。かくして、お京は「出世」と錯覚して妾奉公に行くのである。

しかし、吉三は、お京のそんな姿勢に激しい反発を感じた。出世を拒否し、お京がその生活の全てだった吉三には、お妾になるということがどうしようもなく嫌らしく、汚らしく思えたのではないだろうか。そして、そこで初めて吉三は戸松泉氏の言われるように「自分の心に描いていたお京と現実のお京との落差に気がつ」いたのである^(注18)。さらに、吉三は、現実のお京の心の中が「嘘吐きの、ごまかしの、欲の深い」（本文二〇二頁二行目）ものであることも見抜くのである。だが、お京は「出世」という言葉に惑わされて、自分自身の心をごましていることに気付かないのである。

四

お力とお京は「出世」を果たすための行動に出たが、結果はどうなったであろうか。

お力の朝之助と一夜を共にするという行為は、お力が愛していた源七を逆上させ、お力は源七の刃によってその生を絶たれることになってしまった。

そしてまた、お京の方は妾という法的にも社会的にも「曖昧な存在」となることで金銭面ではその望みを果たすことができたが、その代償として吉三との訣別を余儀なくされた。そして、純粹な気持ちを持った吉三との別れは、お京自身の素直な感情、純粹な気持ちとの別れを示すものだったのではないか。この後、お京は自分の中の全ての感情を殺して、男性の欲望を満たし、父系家族存続の道具として生きていくしかないのである。

結 び

『にがりえ』と『わかれ道』において「出世」を望んだ二人の女主人公、お力とお京の生は、いずれも男

によつて握り潰されている。お力は「出世」のために朝之助に身を任せたことで源七に殺され、お京は、強い出世願望が故に、「利く手」（本文一九九頁一四行目）を持っていながら仕立屋をやめ、「妾」という日陰者として自分の感情を殺して生きていかななくてはならなくなる。

そして、彼女達の望んだ「出世」自体が、玉の輿に乗るという男に身をまかせなくてはならないものだった、ということに私は明治の女の悲劇を感じずにはいられない。（明治期、殊に一葉が生きていた明治二十年代は、「職業に従事す女性」^{注19}貧しいか特殊な女性という通念が生まれつつある時代）であつた。そして、一般的な女性を選ぶことのできたのは「花柳界・妾・結婚」^{注19}だつたと関礼子氏は述べられている。）

一葉は、女でありながら出世志向を持った女性の悲劇を描くことで、一葉自身の苛立ち、女であり、貧しいが故の悲しい叫びを訴えたかつたのではなからうか。女であるために、将来の選択肢を限定され、「出世」の中身までもが、限定されてしまうことへの一葉の激しい憤りをこれらの作品から感じずにはいられない。そして、一葉の苛立ちとは、彼女の死後約百年経とうとしてゐる現代でも決して過去のものとしてではなく、

私の心の中に息づいているのである。

注

- (1) 藤井公明「『にこりえ』」(『樋口一葉研究』桜楓社昭和56・7、58頁3行目)
- (2) 松坂俊夫「『にこりえ』小考」(増補改訂樋口一葉研究)教育出版センター昭和58・10、303頁17行目・304頁15行目
- (3) 前出(2)と同じ
- (4) 岡保生「お力の死——『にこりえ』ノートから——」(『学苑』昭和45・11、日本文学研究資料叢書『幸田露伴・樋口一葉』有精堂昭和57・4から引用、203頁下段24行目)
- (5) 前出(4)の論文、204頁下段7行目
- (6) 前出(4)の論文、203頁下段20行目
- (7) 山本洋「『にこりえ』の丸木橋」(『京都大学国語国文』昭和53・4、日本文学研究資料叢書『幸田露伴・樋口一葉』有精堂昭和57・4から引用、230頁下段11行目)
- (8) 前出(2)の論文、169頁14行目
- (9) 前田愛「『にこりえ』の世界」(『立教大学日本文学』昭和46・6、『樋口一葉の世界』平凡社昭和53・12から引用、217頁8行目)
- (10) 山崎眞紀子「すれ違う物語——『わかれ道』論」(日本文学協会新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉を

- 読みなおす』学藝書林平成6・6、186頁8行目)
 - (11) 関礼子「姉の力樋口一葉」(筑摩書房平成5・11、78頁〜79頁)
 - (12) 高群逸枝「女性の歴史」(下)(講談社文庫昭和47・8、71頁)
 - (13) 藤井淑禎氏は内田魯庵の「国民之友新年付録を評す」(『読売新聞』明29・1・20、27)、風月散人著『十色夫人氣質』(明20・9)を引用して権妻の流行について述べておられ、更に、饗庭篁村の「蓮葉娘」(『読売新聞』明20・11・10・12・30)を引用し、当時は「対立する二つの妾観、二つの出世観の錯綜する世相」であったことから、お京と吉三の考え方の違いを論じておられる。
 - 藤井淑禎「わかれ道」(『国文学解釈と鑑賞』昭55・1、158頁上段14行目)
 - (14) 菅聡子「二葉の『わかれ道』——御出世というは女に限りて——」(『国語と国文学』平成5・2、35頁上段21行目)
 - (15) 松田良一「近代職業文化史日本のシゴトロジー」(東京書籍平成3・9、215頁10行目)
 - (16) 前出(11)の論文、77頁2行目
 - (17) 前出(15)の論文、210頁4行目
- 「仕立ては木綿綿入れは14銭から10銭恰は8銭から10銭、単は9銭から7銭である。」「ちなみに当時の物価

は、白米一〇キロで67銭（明25）、味噌一キロ4銭（明23）、もりかけのそば1銭2厘（明27）、醬油一・ハリツトル9銭であった。また小学校教員の初任給8円（明30）、巡査の初任給9円、大学卒公務員の初任給50円（明27）となっていた。」と記されている。

（18）「共同討議／樋口一葉の作品を読む」（国文学解釈と教材の研究）昭和59・10、104頁上段20行目

（19）前出（11）の論文、92頁15行目、75頁15行目

※本部引用は小学館刊『全集樋口一葉第二卷小説編二』による。但しルビは適宜省いた。